

## Edith Wharton, *The Custom of the Country* 再読

田辺 千景

はじめに

Edith Whartonが1913年に発表した*The Custom of the Country*を要約するなら、金と自由を求めてさまざまな土地を渡り歩きながら、結婚や出産や離婚という経験を重ねていく女主人公Undine Spraggの姿を描いた作品、という説明で事足りてしまうだろう。これほど非常に明快な筋を持った作品であるにもかかわらず、というよりはむしろ、筋が余りにも単純明快であるからこそ、これまでなされた研究の多くは、文学史や歴史文化研究といった大きな枠組みの中でこの作品を論じてきたように思われる。

たしかに、粗筋を考えれば、この作品を「成長小説」の一つの例（外）として研究するのも妥当であろう。<sup>1</sup>あるいはアメリカ20世紀初頭の消費社会や新興階級を考えるための「風俗小説」として、この作品が非常によい材料を提供してくれることも明かである。なぜなら、この小説の大部分は「内面」を描くよりも「外見」を描くことに終始しており、「外見」を語るに伴い、この小説の大部分はUndineの物に対する執着を描くのに費やされているからである。それはすなわち彼女の金に対する欲望の強さを描いていることになり、この小説中金の有る無しは全編にわたってUndineの関心の中心であり続ける。彼女の行動、すなわちこの小説のダイナミズムは、「金」の有無によって決定されているといっても過言ではない。それゆえ、Undineの行動を消費社会の流通になぞらえて分析するのは、この作品が描かれた時代背景を考えるとなおさら、至極最もなアプローチのように思われる。あるいはまた、女性作家によって描かれた、金のために結婚することしか考えられない女主人公は、フェミニズム批評の格好の対象になって当然であろう。<sup>2</sup>

それでは、文化や社会を探るための便利なテキストとして扱ってしまうには

余りある、小説ならではの醍醐味のようなものを、この作品から抽出できないのだろうか。この小説の「外見」に対する執着は消費社会にまつわる問題として片づけられるのだろうか。あるいは思考をせず人間的な愛の片鱗も見せず男から男へと渡り歩くUndineは、フェミニストによってのみ、解釈されうる存在なのだろうか。

この論では、今まで風俗や文化といった大きな枠組みにからめとられて見過ごされがちだった、この小説の語句や構成に注目することで、既に様々な解釈がなされてきたこの小説をもう一度読み解いてみたいと思う。

## 1 変わること

Undine never wanted anything long, but she wanted it “right off”, and until she got it, the house was uninhabitable. (650 emphases added)<sup>3</sup>

この小説を読んでいると、どうしても落ちつかなくなってしまう—というのが、大方の読者の読後受ける印象だろう。この落ちつかないという感覚は、先に引用したようにせっかちで堪え性のない主人公Undineの性格に負うところが大きい。しかし、さらに読み進めていくうちに、この落ちつきのなさは、登場人物レベルにおいても、構成レベルにおいても、あるいは語りのレベルにおいても共通しているこの小説の特徴、すなわち急激な「変化」に起因していることがわかる。

まず登場人物レベルにおける急激な変化を考えてみたい。この小説中、suddenly (730, 754, 767, 770, 782, 829)、abruptly (650, 711, 721, 729, 782, 784, 789)、rapidly (734)、as soon as (732, 760, 782)、right off、faintly (721)、restlessly (762, 783)、brusquely (774)、impatiently (715, 729, 738, 754, 756)、hastily (718, 750, 757)、urgent (778)、instantly (722, 752, 766, 779, 790)、immediate (702, 731, 732, 733, 762)、at once (722, 731, 733)、quick (725, 734, 752, 755, 756, 776, 788, 790)、for a moment (732, 734, 751, 755, 776, 778, 788, 790)、tomorrow-now-right through (723)、right off-this minute (704, 705)など、落ちつきのない、スピードを意識させる単語や、rush (716, 720, 732, 735, 753, 754, 759, 760)、dash (792)という素早い動きを意識させる動詞が頻出する。これらの単語は、すぐに気持ちが変化して次々と行動を起こすUndineに用いられるのは言うまでもなく、その他の登場人物の描写にもたびたび用いられており、いってみれば、この小説の

登場人物はみな落ちつきがないのである。もちろん中でもとりわけ「変化」と密接につながっているのは、三度の離婚と四度の結婚のため移動を続ける Undine と、Undine の動くところに必ず現れ、最後は Railroad King (鉄道王=移動すなわち変化を司る) に成り上がる Moffat だといえよう。この二人の主な登場人物の動きの激しさは、この小説と「変化」との密接な関係を体現したように思われる。

次に、文体のレベルに目を転じてみるならば、指示語の変化に「変わること」の例を見いだすことができるであろう。Wharton と交流があった Henry James も、人物を指す言葉を 1 作品の 1 場面の 1 段落の中でさえしばしば変える。しかし James は、時にはそれが誰をさすのか危ういくらいまでぎりぎりの線で指示語を変えることによって、読み手の意識を覚醒させておくことに成功し、複雑な人間関係を文体にまで持ち込んだとみなすことができるにもかかわらず、Wharton の場合はそれが誰をさすのか完全に明らかなまま、ただ、呼び方をころころと変えていく。つまり、ここでも「変わること」それ自体に意味があると考えべきであろう。また、この小説の語り手に目をむけてみれば、一つの章の中でさえ、あるいはパラグラフの変わり目で、視点人物が移り変わっていく。語り手の目のこの自由な動きは読者を落ちつかせないのと同時に、この小説が激しい動きを描いていることを強く意識させるのに役だっている。

構成のレベルにおける「変化」は、この小説が「書き落とし」によって進行しているところに基づいている。例えばこの小説に於いて大切なことを伝達する役割が決まって紙切れ一枚で済まされてしまっていることは、何を意味するのだろうか。

He[Ralph] had already begun to watch the post for his father-in-laws monthly remittance, without precisely knowing how, even with its aid, he was to bridge the gulf of expense between St. Moritz and New York. The non-arrival of Mr. Spragg's cheque was productive of graver fears, and these were *abruptly* confirmed when, a coming in one afternoon, he found Undine crying over a *letter* from her mother.

Her distress made him fear that Mr. Spragg was ill, and he drew her to him soothingly; but she broke away with an *impatient movement*.

“Oh, they're all well enough - but father's lost a lot of money.”(729

emphases added)

この場面は新婚旅行中、突如Undineの父Mr. Spraggがもはや送金できなくなったと「手紙」で知らされ、ショックを受けるRalphとUndineを描いているのだが、この他にもRalphが倒れたというtelegram (817)や、RalphがUndineの再婚を知るきっかけとなるthe Sunday Papers (905)や、PaulをUndineが引き取るというletter (909)など読者には内容もはっきりとは明かされない紙切れが突然挿入されることで、登場人物の心理が一転してしまうことになる。これらの場面に共通しているのは、小説内時間を切り詰めるという手紙の機能である。

小説内で重要と思われる出来事、たとえばUndineとRalphの婚約、結婚、出産、について読者は事後しか与えられない。Whartonは他の小説に良くみられるような、婚約、結婚、出産、といった行為やそれに至るまでの人間の心理の動きや葛藤を描くことよりも、ある状態から「変わる事」を表現したかったようにも思われる。章が変わると、あるいは時には一つの章の中でさえ、場面や時間が一足飛びに変化していること、そしてそれを意識させる為に用いられてるとしか思えない日時の記録、after X years, X days ago, month, など時間の進行を意識させる言葉の度重なる使用や、formerly (693), once (693, 748, 814), the present (754), now (687, 703, 785), at this stage (749, 763), といった、瞬間の感覚を表現すると同時に、時の流れを意識させるために効果的に用いられている単語などから、Whartonは登場人物を動かしているのと同時に私達にも動くことを感じさせようとしているのは明かであろう。視点、時間、の素早い移動は「結婚と離婚を繰り返す」という程度の単調な内容しか持たないこの小説を引っ張る原動力となっている。このことはちょうどUndineの人生が、移動によって単調さから束の間解放されるのと、パラレルになっていると考えられるだろう。

それでは、この小説中移動にはどんな役割があるというのか。移動について語られる場面を手がかりに考えてみたい。

Ralph interposed with another laugh. "You see, Undine, you'd better think twice before you divorce me!"

"Ralph!" his mother again breathed; but the girl[Undine], flushed and sparkling, flung back: "Oh, it's all depends on you! Out in Apex, if a girl marries a man who don't come up to what she expected, people consider *it's*

*to her credit to want to change. You'd better think twice of that!"* (685 emphases added)

離婚することを“a divorced woman is still - thank heaven! - at a decided disadvantage”とみなすRalphの母に対して、離婚（すなわち“change”）は“credit”であると言い切るUndineは“the pioneer blood in Undine would not let her rest(658)”とか“You[Undine] appear to live on change and excitement (961)”と描写されている。Undineにとって動くことは生きる糧なのだが、こうした動くことと生きることとの関係は、Undineにとどまらずこの小説全体を支配することになる。

Undineはフランス貴族の夫Chellesに“the people[the Americans] are as proud of changing as we are of holding to what we have (982)”とあって非難されることになるが、彼女やMoffatのように移動できる者は成功を納めるのに対して、変化できない社会に身を置くRalphやChellesは姿を消す運命にあることを考えると、この小説において「動くこと」はそのまま生命力や何らかの力を表すのは明かである。そういえば体調を崩したUndineに医者が勧めることは“change of scenes (792)”であった。

I need a change! (779)と叫んでUndineはmonotonyを回避し、速く動くことを希求する。なぜUndineもこの小説も「動くこと」にこだわるのだろうか。この問いに答えるために、次の問いに進まねばならない：その動きの激しさから落ちつかない印象を読者に与え続けていたはずのUndineもこの小説も、結局単調ではなかったか。

## 2 変わらないこと

*“Go steady, Undine, and you'll get anywheres.”*(637)

一貫して「変化」を重んじるこの小説は、その一貫性ゆえに実は「不変」を招くというパラドクスを抱えている。このパラドクスの雛型は、小説ははじめ近くに配されたの上記の会話に見いだせる。Go steady!というこの言葉をきっかけに、Undineはこの小説中一貫して移動を繰り返すことになるのだが、「go=進む（変化）、steady=落ちついて、決まりきった調子で」とは変化と不変が合一した言葉であり、また「anywheres=どこへでも=どこでもない」、とも読めるわけで、この小説中「変化」と「不変」が表裏一体であることが、示唆さ

れていると考えられる。

それでは、この小説における「変わらないこと」とは何なのか。まず、目につくのはUndineの不変性である。WhartonはUndineに徹頭徹尾「子供」あるいは「無垢」という形容を与え続ける(childish disappointment 624, her infant hand 718, her guileless gaze 721, you foolish child 728, her innocence 732, obstinate innocence 738, like a child 782, as limpid as a child's 784, she was still in the toy age 823, her little-girl rages 856, like a sentimental school-girl 862, as radiant as a girl's 887, like a child 968)その結果彼女は“you look as old as you did when I first landed at Apex”すなわち小説冒頭と「変わらない」存在となる。

Undineの不変性は彼女の外見にのみ留まらない。終始落ちつかず移動を繰り返していた彼女の行動にも、不変性は見いだせるのである。例えばUndineは期待しては幻滅する、というパターンを繰り返す。(637, 642, 646, 666, 682, 683, 687, 688, 721, 766, 749, 701-3, 716, 718, 722, 726-736)そしてそれに伴って、失敗を繰り返す。(655, 666, 777)また、消費と購買を繰り返す。(724, 725, 729, 730, 731, 772, 966)あるいは結婚と離婚を繰り返す。こうしてみていくと、この小説中Undineがやっていること、すなわちそれはこの小説の内容そのものなのであるが、全て繰り返しばかりであることが読み取れる。

さて、このように彼女が同じ行動を繰り返す原因は、Undineが内省せず、目に映るものしか認めないところにある。

I[Undine] never cared much about spirits (721).

It was admiration, not love, that she wanted...her conception of enjoyment was publicity, promiscuity. *Any personal entanglement might mean “bother”*, and bother was the thing she most abhorred...so malleable outwardly, she had remained *insensible to the touch of the heart* (769 emphases added).

She disliked to feel the least cease in the smooth *surface* of existence. She had always been what her parents called “sensitive” (772 emphasis added).

Undine's estimate of people had always been based on their *apparent* power of getting what they wanted (988 emphasis added).

彼女の「感受性」とはものごとの「外見」にまつわるものであり、人間的な付き合いは面倒でしかない彼女は、自分も「見られること」を要求する。「見

られること」によってのみ彼女の存在が認められると信じているからである。また、彼女は“fiercely independent and yet passionately imitative(633)”と描写されるが、彼女にとって外見を真似することは、その存在に近づくことを意味する。

このようなUndineの「外見」に対する固執は、実はこの小説の語り手の「外見」に対する固執と呼応しているのである。この小説中、身体描写はしつこいほど繰り返され、読者の目を引くことになる。目、眉、唇、手、あるいは身体全体についての描写がさまざまな場面で繰り返され、さらに個々の登場人物ごとに癖をもたせ（Ralphは笑う、Moffattはくちぶえ、Mr. Spraggは爪楊枝を使う）身体描写を繰り返す。ここで注目したいのは、この小説では人物描写するために、身体描写をする、というよりも、身体描写することで、人物描写したことにしてしまう、という点である。

さらに語り手は「見えているもの」を描くことに専念する。細かい室内の内装の描写、服装の描写など「目に見えるもの」を描写する事でこの小説の大半は占められている。結婚や離婚でさえも“in the matter of giving away rings (638),” “slipped on the fourth finger of her recovered hand a band of sapphires (678),” “with a magnificent gesture she tore Marvell’s ring from her finger (704),” “she was glad she had put on her rubies (1011)”, というように指輪をはめる、はずす、といった「目に見える」行動で表現されている。このような表現方法は、“lack of language (731)”といわれるUndineが、困ったことがあったとき「病気」になってしまうのと似ている。つまり「目に見えないもの」を表現するには、「目に見えるもの」をもって表すしかない、という態度である。

「見えないもの」、例えば感情や心理を映し出すものとしての「見えるもの」、すなわち表情や背景を描写することは、一般的な表現方法である。しかしこの小説において「見えるもの」はもっと大きな役割を持っている。Whartonは「見えない」内面を変えてしまう「見えるもの」の力を描いているのである。たとえばUndineはMoffattの外見をHis face...a look of jovial cunning which Undine had formerly thought “smart” but which now struck her as merely vulgar...He had a [brisk] swaggering step, and the [faintly] impudent tilt of the head that she had [once] thought “dashing” (693)と感じたり、その後“As he[Moffat] spoke, she saw his expression change, and his eyes grow younger (976)”と思ったり、しかし結局再び、“his loudness and redness (1012)”が気になるようになる。このような「外見」についての印象は、相手に対する愛情や憎悪から生じているもの（結果）という

よりも、それらを生じさせるもの（原因）として機能している。

こうしてみるとこの小説は、主人公Undine同様、「見えないもの」より「見えるもの」に一貫してとらわれていることになる。さらにUndineが落ちつかず移動を続けても、結局変わらなかったということは、そのままこの小説の構成とパラレルになっている。特にこの小説終わりでUndineが結局最初の夫Moffattと結婚している、ということは、この小説が変化を描きつつも、不変を描いたことになる。Undineをいつも“change”している存在と描きつつ、いつまでも変わらない子供として描いていることは既に確認済みだが、*The Railroad King*に成り上がった「変化の権化」ともいえるMoffattがもたらす変化は、Mr.Spraggがずっと昔に捨てた仕事をやり直させること (708)であり、reminded her[Undine] of long forgotten things (976)、すなわち実は過去をもたらす働きでしかない。UndineもMoffattも、この小説における変化や移動とは不変と表裏一体であるということを体現している：They[Moffatt and Undine] are always coming and going (1003).

### おわりに

He [Paul] saw too many people, and they too often disappeared and were replaced by others (1005).

主人公の名によって、水の流れに例えるならば、川のように流れる(flow)のではなく、湖面を循環する(revolve)ようなダイナミズムから成り立つこの小説は、それでは何を描こうとしたのか。

先に挙げた一節は小説のおわり間際にUndineと亡きRalphの間の息子、Paulが自分をとりまく人々について述懐した時のものである。彼の印象は、この小説を読む私達が最終的に辿りつく印象を代弁するものだといえよう。すなわち、この小説は、Undineを中心とし、多くの人々、例えば、Ralph、Poppie、Peter、Chelles、などが現れては消えていく。彼らは、結局はうやむやのうちにいなくなってしまう、また次の人間に関心は移ってしまう。Undineの飽きっぽい性質が、そのままこの小説の構成に反映されて、彼女の周囲の人々は、かわるがわる登場しはするものの、小説全体の流れを変えることはけっしてない。つまり彼らは交換可能な存在(replaced by others)なのである。Ralphの死という重大な変化をもってしてもUndineは変わらず、彼女の運動（変化）は不変なのであ

る。「変化」という「不変」は、この小説の基調を成すということは既に述べたが、あえてそれを解釈するならば、かけがえのないものなどないということ、なくすことへの恐怖や流れる時間からの解放といえるかもしれない。Undineは周囲の人々が次々に消えていくことに恐怖感というものがまったくない。だからいつまでも運動を続けることができるのである。<sup>4</sup>

Undineという神話的名前について、今日まで研究者によってさまざまな解釈がなされている。消費文化に関心の中心をおけば、その名前に含まれる水のイメージを流通になぞらえ解釈するであろうし、女性像を論じるならば、子供を産んではじめて人間になれるというあの神話を手がかりにするかもしれない。しかし、Undineの語源が“wave”であることに注目すれば、本論もまた補強されるのではないだろうか。すなわち“wave”とは動くもの（変化）であると同時に、同じ動きを永遠に繰り返すもの（不変）であるのだから。

#### 注

1. Richard H. Lawson, *Edith Wharton*. (New York; Frederick Unger: 1977) Lawsonは“building roman”というよりも“pica resque novel”としてこの作品をとらえ、“picara”としてUndineを分析している。
2. David Holdbrook, *Edith Wharton and the Unsatisfactory Man*. (New York; St. Martin's, 1991)
3. Edith Wharton, *Novels*. The Library of America 30. (New York; 1985)以下作品からの引用は全てこのテキストによる。
4. *The Custom of the Country*が執筆されていた当時、再版されたTheodore Dreiserの*Sister Carrie*は、Undineと同様、男性遍歴（という運動、変化）を繰り返したあげく、「成長のない（変わらない）存在」として描かれている。小説おわりで、rocking chairに座り前後に行きつ戻りつ揺られるCarrieの姿は、彼女の運動が結局変化をもたらさないことを端的に示しているとも読める。CarrieとUndineの類似点や相違点について本論ではこれ以上言及しないが、アメリカ文学の一つのヒロイン像として興味深い。